

主が深く憐れられた

(マタイ9・35〜38)

一、なぜ、巡られたのか？

35節をご覧ください。それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた。とあります。これは、主イエスの公生涯における一時のことではありませんでした。と言いますのは、4章23節にも次のように書かれているからです。イエスはガリラヤ全域を巡って会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病、あらゆるわずらいを癒やされた。と。すなわち主イエス・キリストは、エルサレムで十字架にかかられるまで、人々のところを巡り歩き、御国の福音、すなわち善き知らせを伝え、それに伴う癒しのみわざを行っておられたと知ります。その際、主が群衆をご覧になると次のように思われたというのです。それが36節です。また、群衆を見て深くあわれまれました。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。と。群衆といえどもイスラエルの民です。神の栄光を現すために選ばれた民です。なのに、羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていた。とご覧に

なりました。どういう状態だったのでしょうか。前後関係より、見えてまいります。前の箇所を見ますと、人々がイエスのもとに、悪霊につかれて口のきけない人を連れて来た、とあります。イエスが悪霊を追いかけると、口のきけない人がものを言うようになり、群衆は驚いて、「こんなことはイスラエルで、いまだかつて起こったことがない」と言いました。ところがです。当時のイスラエルにおいて、信仰者を代表し、信仰の主導権を担っていたパリサイ人たちは言いました。34節です。しかし、パリサイ人たちは、「彼は悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ」と言った。と。神がなさったわざを、悪霊の仕業と見ました。これが、当時のイスラエルの霊的な状況でした。結果、羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていきました。

二、主が深く憐れられた

36節の「また、群衆を見て深くあわれまれました。」という聖句を、じっと見つめたいと思います。「あわれむ」ということは、世の中ではあまり良い意味で使われませんが、ここで使用されていることは、内臓が動かされるという意味です。すなわち深い同情心のゆえに、居ても立ってもいらなくなることで、それほどまでに当時の群衆、すなわち一般民衆は、神のことは

の飢饉とも言える状況に陥っていたことを知ります。おそらく、人々の表情は元気で明るかったことと思われる。ですが、主イエスが見られると、彼らがみことばに養われず、滅びに向かっているように見えたのだと思われまします。かつて主は、イスラエルの民に語りられました。《申命記8・3b人はパンだけで生きるのではなく、人は主の御口から出るすべてのことばで生きる》と。旧約時代、《主の御口から出るすべてのことば》とは、律法(トーラー)の言葉であり、それに伴う御霊の働きでした。ですが、教会時代に生かされている私たちにとっては、キリストの福音のことばであり、聖書であり、聖霊です。いずれにしても、当時のイスラエルの民衆は、主イエスさまが深い同情を寄せられるほど、霊的に干からびている状態でした。彼らに必要なのは何でしょうか。みことばです。そしてみことばをまっすぐに解き明かす働き手でした。

三、「働き手を送ってください」

群衆がみことばの飢饉に陥っている姿を見られ、深く憐れられた主は、次のように語られました。37節、38節です。《そこでイエスは弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主にご自分の収穫のために働き手を送ってくださいるように祈りなさい。》と。《こを讀んで、すなわち主

イエスが語られたことばを聞いて、「変だな」と思われた方はいるでしょうか。「まず、あなたがたが収穫のわざに携わりなさい。しかし働き手が足りないでしょうから、収穫の主は、収穫のために働き手を送ってくださいるように祈りなさい」と語られました。「収穫」とは「世の終わり」の意味で、収穫の時でもあります。その際、収穫のわざに携わるのは、だれなのでしょう。主が選ばれた働き手です。なぜなら、《ご自分の収穫のために》と語られていますように、伝道と収穫は神のわざだからです。そこで、主ご自身が働き手を選ばれたという、10章1節以降につながるわけです。全員がみことばを取り次ぐ働きをするわけではありません。神によって、その働きに召された方が立ち上がるのが良いです。エペソ人への手紙にも書いてあります。《4・11こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒ある人たちを預言者ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。》と。

そういうわけで、「自分のみことばを解き明かす務めに奉仕したい」という願いが与えられたら、祈って温めてください。主が召しておられるのであるなら、時がやってまいります。